

山形大学附属博物館報 15

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1989. 3. 1

目次

大学における博物館	(1)
シトー修道院とブルゴーニュワイン	(2)
帰化植物	(3)
資料紹介	(5)
お知らせ	(6)

大学における博物館

館長 横山 昭 男

本学の附属博物館は、大学の準附属機関という性格の施設で、その規模は小さいが全国の大学の中でも数少ない教育・研究施設の一つである。博物館は一般的に、自然現象や人間の営みを説明する資料を保存し、これらを通して、知識の増進と教育の啓蒙を行うところであるといわれるが、その設立事情によって、歴史・考古・芸術・自然科学などのうち、何をその中心内容とするかは多様である。

本館の場合、その母体をみると、教育学部の前身である師範学校の「郷土室」にあり、その内容が学問研究上でもとくに認められて、昭和27年、山形大学附属郷土博物館（昭和53年、附属博物館と改称）となり、その後大学の発展とともに、その歩みは遅々たるものがあるとはいえ、整備充実されている。所蔵資料は主に、歴史・考古・民俗及び動植物の標本などの自然科学資料が中心であるが、今後、諸科学の資料の収集・保存と共同研究や教育への利用を目的とした総合的な博物館をめざしているところである。

博物館の一般的な目的は先にのべたが、それは今日の日本の状況、つまり高度な科学技術の発達や高齢化社会などにもなる社会的な要請も高まって、広く全国に普及し、多くの立派な施設ができていく。学習社会といわれる日本の現状が、博物館の活動に期待するものが極めて大きいという

ことでもあろう。博物館には、自然系、歴史系、芸術系などに分れた専門性をもつところも多いが、それらを総合した内容をもつものも、博物館の一つの特色であろう。科学技術の高度な進歩は、一方で人間の営みとその環境を全体として捉える見方を欠落させているのではないかという反省がある。世界的にみても博物館は古い歴史をもっているが、その背景には同様な意味があったといえよう。

大学における博物館は、一般社会のそれに共通するものもあるが、異なる面も持っていることは当然である。それはまず、資料の収集保存と利用は、学内における研究・教育に資するためのものであり、同時に、学外の研究者や社会一般にも公開・利用されるものであることはいうまでもない。資料の保存・利用のためには、その整理・管理とともに目録の作成などが整備されていることが前提になる。本館としても、歴史資料などでは、学内・学外の研究者の利用も多いので、その整理を急ぐとともに、他の部門の充実もできる限り図っていくなど、その課題は多いといわなければならない。

博物館の教育・普及活動としては、学生の博物館学の実習と一般対象の公開講座を開催している。公開講座は、昭和56年から63年まで計7回行っているが、大学での他の公開講座は、学部中心で、テーマもそれぞれの専門分野の特色をもつものに対し、博物館主催のテーマは、水と文化、光と生活、食と文化など、学際的なもので、数学部の教官にそれぞれ講師を依頼し、人文・社会・自然各系の専門分野から、最新の研究を踏えて分りやすく解説していただくことにしている。それは、総合大

学の特徴を生かした、また博物館の目的に沿った活動であると自負してもよいと思われる。そのことは、大学と社会との接触を深める一つの方法として、また学内の共同研究利用の施設としての存在意義を高める意味でも望まれていることと思われる。しかしそのためには、各学部の教官の深い理解と協力が必要であり、今後ともよろしく願います次第である。(教育学部 教授)

シトー修道院とブルゴーニュワイン

関 口 武 彦

ブルゴーニュの首都ディジョンから南におよそ20キロ行ったところにシトー修道院がある。シトー入口でバスを降り、修道院の境内に入ると、わが国の農村からはすでに失なわれた堆肥のにおいと干し草のにおいが漂ってくる。11世紀末に創設されたシトー修道院は、のちに同院傘下のクレルヴォー修道院長になった聖ベルナルの下で、12世紀前半に最盛期を迎えた。その後盛衰の歴史を繰り返したが、フランス革命のときに修道院は廃絶した。シトー修道士はスイス、ドイツ、ロシア、フランスの各地を転々とさまよったのち、ようやく1898年になって1世紀ぶりに旧領シトーに戻ったのである。これより数年前、シトー修道会の流れを汲む幾つかの教団が合体して厳律シトー会を結成したが、あらたに再建されたシトー修道院にはシトー会の母修道院としての地位が認められて今日に至っている。函館西方の上磯町にあるトラピスト修道院もこの厳律シトー会に属している。



シトー修道院の農場を望む

右手に見える白壁のやかたは現存する最古の建物である
旧修道院回廊室(15世紀)

ブルゴーニュ産ワインはブルゴーニュの特産大使と言われ、「ブルゴーニュ＝ワイン閣下」(Monseigneur le Vin de Bourgogne)の尊称を奉られているが、ブルゴーニュの名声を高からしめた

ワインの普及に絶大な寄与をなしたのがシトー修道院を含むベネディクト系修道院であった。シトー修道院誕生前にもすでにトゥルニユス、サン＝ベニーニュ、クリュニーといった大修道院は、配下の領民にたいしてブドウ栽培をさかんに奨励している。だがシトー会修道士たちの経済生活上の一大特徴は、彼らが好んで僻地の地に移り住み、自らの手で森林、原野を切り開いて、耕作・牧畜・ブドウ栽培の直接経営に乗りだしたことにある。シトー会士はブドウ畑の造成に貢献しただけではない。ブドウの品種および土壌の改良、取り木や剪定技術の改善などを通じてブルゴーニュ＝ワインの品質向上にも一役買ったのである。さらにブドウの栽培・収穫・醸造・販売にかかわる諸規制を領民に遵守徹底させることによって、ワイン生産に関する統一的慣習をブルゴーニュ一円に広めた功績も忘れてはならないであろう。

わが国の銘茶の産地が禅宗の名刹のあった地域に分布しているように、良質ワインを産するブドウ園の多数が旧修道院領内に集中しているのは興味深い。茶の湯と禅の関係以上に、キリストの血であるワインと修道院生活とは緊密に結びついていたと言えよう。すでにクリュニー修道院はマコネ、ボージョレ地方にブドウ畑を所有していたし、サン＝ベニーニュ修道院もジュヴレ＝シャンベルタンにブドウ園を持っていた。またシトー修道院は、ディジョンからボヌヌを通過してシャニーに達するワイン生産のベルト地帯に多数のブドウ園を所有していた。シャンボル＝ミュジニー、ヴァージョ、ヴォヌ＝ロマン、アロクス＝コルトン、ボマール、ムルソーなどがそうである。現在これらのコミュニティ名は同時に銘柄名としても知られているが、最高級ワインの幾つかがまたこの地域から産みだされることは周知の事実であろう。

ブドウ園がその持主を替えたのはフランス革命のときであった。由緒ある修道院の多くは取りつぶされ、所領は没収されて国有財産になった。旧修道院領は分割されて競売に付され、富裕な市民がそれを買取ったのである。数多くの優秀ブドウ園が新興市民の手に渡ったときから近代フランスの美術術が始まったことは注目される。ブルジョワジーは革命で失業した官廷料理人を雇ってレストランを経営し、高級ワインを食卓に並べるために、自ら所有するブドウ園と醸造所に借し気もなく金銭をつぎ込んだ。ビジネスの時間が大幅に

延長したために1日3食制が社会的習慣になり、照明の発達とあいまってディナーは午餐から晚餐へとその性格を変えた。忙しいブルジョワ階級にとってディナーは一家団欒の貴重なひとときになり、1日のうちで最も重視される食事になっていった。ナイフとフォークの使用が一般化し、二つ以上のグラスをとり揃えて料理の種類に応じてワインを飲み分けるという食事作法が成立したのもこの頃である。複雑でデリケートなブルジョワジーの美食術を一般庶民が見倣い、それに追随することによって現代フランス人の食生活とテーブルマナーが次第に形成されていったと言える。

「ブルゴーニュの名には豊饒の響きがある。パリがフランスの頭脳であり、シャンパーニュがその魂であるとするれば、ブルゴーニュがその胃袋であることは疑いない。」これはイギリス人のあるワイン通の言葉だ。シトー修道院でつくられるパンとチーズのうまさにはすでに定評があるが、銘酒の産地として名高いニュイ＝サン＝ジョルジュから隔たること僅か10キロのところだけに、ここで造られる地酒の味もまた格別である。つまりブルゴーニュ人の食生活全般のレベルが高いのである。これこそが本当のグルメというものであろう。1本20万円近くもする銘酒中の逸品、ロマネ＝コンティを手近かに味わうために、その販売会社を買収しようとしたり、晩秋に出回るボージョレ＝ヌーヴォーをフランス人が目をむくほど多量に航空便で買いつけるといったことは、おそらく食生活の豊かさとは直接関係のないことであらう。それは根底において、珍味を追い求める如何物食い趣味とさせて異なるものではないからである。

(教育学部 教授)

帰化植物

安部 守

博物館学実習で植物の野外観察を行うことになって3年になる。夏期休暇中に行われるが、年々受講生が増えるので2度に分けてやらなければならなくなった。半日は学内の植物を、あとの半日は馬見ヶ崎の河川敷の植物を観察することにしている。野外だから天候が大いに気になるところだが、幸い毎年好天に恵まれている。ただし、あまりの晴天だとかえって困ることがある。気分を悪くする学生が必ず数人でてくるからである。ツ

バの広い帽子、濡れ手拭、缶ジュースなどの飲み物の用意が必要である。

さて、馬見ヶ崎では毎年新しい植物に出合う。1986年にはシナガワハギ(マメ科・東アジア原産)が新顔として数株見付かった。「草木図説」(1856)に図がある。江戸時代に渡来したものである。東京品川に由来する名である。50~80cmの背丈で、黄色い花を穂状にピッシリ付ける。越年性の植物で、翌年には一面黄色い絨毯を敷いたように広い範囲に繁茂した。もう居付いてしまったようで、その後は同じ情景が毎年見られる。

1987年にはシャグマハギ(マメ科・欧州原産)がはじめて入った。20~30cmほど。円錐形の頭状の花序で、萼が非常に長く、一見女性が頭髪の中に入れる「入れ毛」(赤熊・シャグマ)に似ているのでこの名がある。土壌などの条件が合わないようで、増える形跡は見られない。この年には花粉病の原因になるとして嫌われるブクサ(キク科・北米原産)も発見された。和名はアメリカでHogweedと呼ばれているのに基づく。日本への渡来は古いようで、1880年に千葉県南部で採集された記録がある。山形では珍しい植物であったが花粉病の原因になるとあつては見逃せない。見かけるたびに抜き取っていたが、とても繁殖に追い付かない。その後増える一方で、今では大学の構内でも見かけるようになった。1988年も新しい一種(マメ科)を採取したが、まだ検索ができていない。

これらの植物は外来のもので「帰化植物」といわれる。帰化という言葉は「日本書紀」にてでくるといふ。「化帰」、「来帰」、「投化」、「化来」という言葉もあり、いずれも類似の意味があるらしい。王化を慕って渡来した人々が「帰化人」とみなされている。人間の場合はそれでよいと思われるが、動植物の場合は帰化の語は相応しくない、と植物分類学の碩学・牧野富太郎博士は云う。帰化という言葉が植物に用いられたのは明治27年ころらしい。博士は「馴化」が適当であると主張するが、既に古くから呼びならわされている「帰化植物」の語を廃することは出来ないとして、御本人も植物図鑑などで「帰化植物」と記載している。帰化動物も多くある。たとえば本州各地に生息するアメリカザリガニは大正13年にニューオーレアンズから神奈川県の小川に放たれた。食用の目的である。それが次第に南北に移動し現在に到っている。動物は移動できるから伝播は早い。しか

し海は渡れないから、北海道では少なくとも1987年までは棲んでいなかったようである。ところが室蘭のあるマーケットで、子供のペットとして1匹200円で売られているのに出会った。北海道には日本古来のザリガニが棲んでおり、アメリカザリガニが自然に散逸したらどうなることかと気になることである。

帰化植物でも伝播の早いものがある。種子に冠毛があって風で運ばれる種類である。キク科のものがそうである。秋、関西方面に旅をすると、2mもあるセイタカアワダチソウが車窓から到る所に眺められる。戦後福岡に入ったのがはじめてのようで、以来、南へ北へと移動し、昨年は宮城県の新潟ダムの附近に散見され、いよいよ東北地方にも侵入しはじめたかと思ったことである。山形県ではまだ見られなかった。



山形市内に現われたセイタカアワダチソウ
(1988年10月)

ところが昨暮、いきつけのソバ屋で花瓶に生けてあるセイタカアワダチソウを見た。聞けば、厚生年金休暇センター附近で採ってきたという。早速車をとばして行ってみると、あるある。空地を占領して黄色の花が波打っているではないか。山形の市街に下りてくるのは時間の問題かと思う。現に山形バイパスの沿線にちらほら見られるようになった。馬見ヶ崎の河川敷に現われるのもそう遠くはあるまい。(理学部 教授)

● 博物館実習(植物実習)

野外観察レポートより

人文学部実習生 大熊 幸子

午前中はあいにくの雨模様となり、傘をさしな

がらの観察採集となった。植物も雨にぬれてとても色鮮やかできれいだった。いつも見なれているキャンパス内であるが、先生の話を聞き、おどろくほどたくさんのおもしろい植物があるのにはびっくりしてしまいました。見た目はかわいらしいのに、においの強烈なクサギ、ヘクソカズラなど実際に目でみて、手でふれて、においをかいてはじめて納得するものばかりでとても新鮮だった。前からずっと見たかった和歌に詠まれたアカネが意外にもキャンパス内で見られたのでうれしく思った。学内キャンパスでも充分に勉強になったと思う。

午後からは曇がちの中にも晴れ間も見え、川の水もさほど増水してはいないとのことだったので馬見ヶ崎まで全員徒歩で向い、道々の植物を観察しながら河畔までついた。(一部略)

教育学部実習生 堀 賀 泉

安部先生の話によると、山形にはまだ自然がたくさん残っているとのこと、今日の馬見ヶ崎河畔における野外観察でも多くの植物を知りそれらに触れられたと思った。印象に残ったものの一つにニセアカシアがある。その小葉のたくさん集まった羽状複葉が一つの葉であることにはびっくりした。またユリ科のヤブカンゾウとノカンゾウも花がきれいなので印象に残っている。前者はおしべとめしべがなく根で増えてゆくために群生している。一方後者はおしべとめしべが並んで立っている。今日の野外調査はふだん自分一人では見つけられない植物を発見し、見過してしまっていた植物を再認識できてよかった。(一部略)

理学部実習生 佐々木 潤 子

馬見ヶ崎河畔は春～夏のときに一度来ているが、日差しが強い分だけ力強い感じを受ける。在来種ではないものとしてブタクサやシナガワハギなど数年前までは全くみられないものが増えたということが印象的だった。人間が運んできたとはいえ、広い目でみれば移りかわりの中の一現象ともいえるのではないかと思った。ハエトリナデシコの濃いピンク、タケニグサの乳液の黄色のそれぞれの色の強さが夏の日差しに対抗しているようだったのと、ナフシロイチゴの実のすき透るような赤い色がきれいだったのが印象に残った。(一部略)

資料紹介

テツギョ

徳井田 克 範

宮城県山の山形県との果境近く、加美郡小野田町と宮崎町との、町境も判切しない山奥に魚取沼という沼がある。私は昨年（昭和28年）の夏に山形県総合学術調査会の動物班の一員としてこの沼を訪れ、また片手に網を持ってはだかで泳いできた。水際にミツガシワが繁茂した。周囲約1kmのこの沼の水は清流で、よい心持ちであった。しかし、動物班の先輩（とはいえ20歳以上年上の先生であるが）の御手を勞し、自らも濡れそうになりながら、手にした魚はフナ一匹で、それも採り逃してしまい、目的のものにはまみえることすらできなかった。

その目的のものというのが、テツギョと呼ばれる魚である。これは大正11年に東京で開かれた平和記念博覧会に山形県若稲沼（若畑沼）のものが出品されたのが初めてであったが、その後、東北帝国大学の朴沢三三博士によって、宮城県魚取沼のものが学術的に報告され、昭和8年に国の天然記念物に指定された。また山形県若畑沼も、昭和28年にテツギョ生息地として山形県の天然記念物に指定されている。写真は、許可を得て昨年6月20日に若畑沼で採集した、テツギョのものである。

一見して解る通り、テツギョの第一の特徴は、その長いひれで、この長いひれを揺り動かして泳ぐ姿は、水槽内ですら、実に見事である。また、私はフナと同様の色をしたものしか目にしたことがないのであるが、朴沢博士の報告などによると、その名の由来といわれている鉄サビ色のものや赤、白など、さまざまな色のものがあるという。これらの形態は、アメリカで生れた替星魚（コメット）や山形金魚、庄内金魚とほぼ同様で、フナ、テツギョ、キンギョの関係が興味深い。

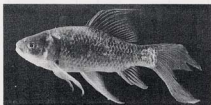
金魚の大家として有名な松井佳一博士は、フナとリュウキンの交配によって、テツギョと同様のものが得られること、服部広太郎博士によって行なわれた、魚取沼産テツギョどうしのかけあわせによって開き尾の仔魚が得られたことから、テツギョはフナとキンギョとの交雑によって生じたものであろうとした。現在も、この説にかわる知見

はなく、種々の本に松井博士によって描かれた系統図が載せられ、テツギョはキンギョの一品種とされている。が、国の天然記念物として堅く守られてきた魚取沼産のテツギョは、誰にも調べられていないというのが実状なのであり、昨年（昭和28年）の私共の調査行も、本学理学部の大津高教授の大変な苦勞の結果、採ってもよいがすぐに放せという条件付で、やっと許可を得たのであった。

その様な煩雑な世の中のことを忘れさせてくれる一語が、朴沢博士のテツギョに関する報告のなかで述べられている。魚取沼に棲む山男の話である。報文によれば、彼は当時35.6歳の若年で、身にボロをまとはして居るが、言葉解し、気持ちは優しく、季節々々の山菜や果物を採ってくらしていたそうである。山形県の出身で、かつて婿養子となったが家庭の不和から気が憂鬱になり、ついに山奥のこの沼に逃げてきたのだという。山奥に隠通した理由は現代的でもあるが、この様な山男が人知れず存在したことは隔世の感がする。昭和のはじめの事である。

彼はまた、奇想天外な方法でテツギョを捕えて食している。まず湖岸に平行して堰を設け、湖水の出口を止めて湖水面を上げる。すると堰の中に水が入り、それと共にテツギョも入る。そうしたら堰の口を閉じて湖水の出口を開き、水がひいた後に、堰の中にとり残されたテツギョを捕えるというのである。智慧と知識とは全く異なるものとよく言われるが、この山男の智慧と行動力には感服する許りである。この話は、旧制山形高等学校の安斎徹先生の著書、『熊・樹木・自然』にもとりあげられている。本学附属図書館の書庫にあるので、興味のある方は、ぜひ御一読下さい。

現在、魚取沼のテツギョがどうなっているのかは、全くわかっていない。機会があればもう一度沼に行き、今度こそテツギョの泳ぐ姿を目にしたいと願っている。（大学院・理学研究科）



テツギョ

昭和63年度
公開講座・特別展を終えて

公開講座「食と文化」

昭和63年度の公開講座は、私達が生きていく上で欠くことのできない「食」と文化について、あらゆる分野から詳しく、将来への指針とすることを目的に開催されました。昨今の日本では、生きるための「食」というより、「食」を楽しむ傾向に変わりつつあり、「食」への関心も高まってきているためか、この講座も定員を上回る受講の応募があり、盛況のうちに終了式をむかえることができました。

講義科目及び講師

回 月日	講義科目	時間	官職氏名
	開講式	30	
第1回 9月17日	歳取り魚としての鮭と鰯	120	東北学院大学教授 岩本山 輝
	ワインを語る	〃	教育学部教授 関口 武彦
第2回 9月24日	腸の病氣と食生活	〃	医学部助教授 高橋 恒男
	栽培作物と食卓の内容の変遷	〃	農学部教授 笹原 健夫
第3回 10月1日	米食と食生活	〃	農学部教授 保井 忠彦
	食の文化	〃	教育学部教授 富江ハス子
第4回 10月15日	中国文学と「食」	〃	人文学部助教授 芦立 一郎
	消化器外科と食事	〃	医学部助教授 亀山 仁一
第5回 10月22日	農耕文明	〃	理学部講師 野間 元作
	たべもの歳時記	〃	教養部教授 山形 理
	終了式	30	

特別展「食と文化」

公開講座「食と文化」の延長として開催された本展は、上記講座の内容を実際の資料を用い広く一般に紹介したものです。

食文化の変遷を表す「食の道具」、日本人の食

文化を代表する配膳方法などから食の歴史を探り、また欧州人の美食追求の歴史を物語るワインについても触れ、人間にとって「食」とはなにかを追求しました。

1. 期間 昭和63年11月4日(金)～15日(火)
2. 展示内容

第1展示「器が語る日本の食文化」

- I 古代日本人の器
石器・土師器等19点(当館所蔵)
- II 日本人の食の道具あれこれ
かて切器、自在鍵、指燗等15点(当館所蔵)
- III 食の作法の文化 指導：富江ハス子(教育学部)
本膳三汁七菜の配膳、茶懐石の配膳 ほか
- IV 古文書に見る献立 指導：中沢勝磨
山辺町稲村家「献立覚」ほか

第2展示「ワインが語る欧州の食文化」

- I ワインが出来るまで 協力：タケダワイナリー
製造過程写真27枚、製造過程のワイン見本、ワイン製造に使用した昔の道具 ほか
- II 発酵とは…… 指導：安部守・菱沼佑(理学部)
各種糖の発酵試験 ほか
- III ラベルが語るワインの歴史
指導・資料提供：関口武彦(教育学部)
欧州のワインラベル(114点)、ワイン解説書

昭和63年度学芸員資格取得のための博物館実習実施者

学部	履修者数	合計
人文学部	49	90
教育学部	9	
理学部	32	

昭和62年度見学者総数

一般成人	個人	556 (人)
	団体	75
大学生	個人	512
	団体	111
児童生徒	個人	3
	団体	126
合計	個人	1,071
	団体	312
	総数	1,383

山形大学附属博物館 AC15 1989. 3. 1 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小倉町1丁目4-12
☎0236-31-1421 (内) 2921